佐伯史談

第二四号

「郷土史研究」誌
通算百三十六号

昭和五十三年七月十七日発行

佐伯史談会
事務所 佐伯市大字稲垣字龍護寺 羽柴

昭和53.7.19

巻頭言

国木田独歩の足あと
——佐伯独歩会へ期待する——

佐伯史談会
副会長　羽　柴　　弘

去る六月二十三日は、国木田独歩が、神奈川県茅ヶ崎の南湖院で病没して、七十一年目の命日にあたる。時は明治四十一年、独歩はまだ三十八歳であった。

佐伯には城山山頂に「独歩碑」があり、三の丸上段に「城山」の碑が建てられてあるように、独歩の文学は佐伯各地に息ずいている。とくに最近は県が主唱する「ふるさと振興」運動、市民の「歩こう会」や毎朝の「城山登り」などによって、独歩の足跡をたどる人が多くなった。そして、佐伯の山野をこよなく愛した、独歩の文学が求められている。これはよいことである。

わが佐伯史談会は、過ぐる二十年の歩みの中で、独歩の文学遺跡をたどり、城山はもとより、番匠川の民とりから堅田の野道をあちこちと歩き、元越山・尺間山・遠くは「廣狩」の舞台鶴見半島の浦々まで、中には同じ所を何度も訪ねている。そしてその文学作品を通して、私共は明治中葉のわが郷土の姿をなつかしみ、八十数年後の今日のわがふるさとの現状と思いくらべ、すでに没後七十年へた独歩の自然観照の鋭さを改めて見直し、なおまぶべきことの多さに驚いている。

佐伯についての独歩の文学は、年月を経てもその清純さをいささかも失わず、その感銘の文章は、佐伯人の心をとらえてはなさない。私共は、なお、なお独歩の名文章を暗んずる（暗誦できる）位、その作品を学ばなくてはならない。

いったい、独歩の作品で佐伯をとりあげているのにどんなのがあるのか。また、独歩はどんな風に城山に登ったか、鶴谷学館の生徒達と堅田路をどう歩いて、青山の奥黒沢の桜見に行ったか。あるいは切畑一直見一川原木から、どの峠を越して小川の銚子渓谷に二度も出かけたのか。元越は「元越山

本号の内容

巻頭言 国木田独歩の足跡（羽柴）一
随想 二十四年記念行事に（柳平虎）三
〃 神話の里に訪ねて（高木）六
特別寄稿 古田豪作（大久保）七
探訪記 佐伯城址（羽柴）一一
研究 下浦の開発史（中）（柳平虎）一九
資料 満州佐伯村おぼえ書（2）（矢野）二五
探訪記 百年の都扶余（吉藤田）二七
史談 因長遠路斬の事（羽柴）三二
随想 思い出の食べ物（3）（神野）三三
探訪 西野・日露戦役記念碑（山本）三六
記録 わがふるさと元町誌（3）市郎瀬尾
会員消息 (2) 思い出のわらべ唄一三
四国霊場めぐり・三重行一三
会員の動静・寄付・会費一五

に登るの記」で制合に詳細であるが、天間登山、一泊、そして彷岳への二日がかりの回遊は、「欺かざるの記」以上のことは、実際に歩いて足でたしかめる外はない。「源おぢ」、「春の鳥」、「鹿狩」、「豊後の国佐伯」などの名文章となり、また日記「欺かざるの記」の中に、不滅の文学となって残っている。しかし、これらの作品をさぐり見ようとしても、意外と手近なところにないので困る。

一介の青年教師、二十三歳の国木田独歩は、明治二十六年九月の末の日に葛港に上陸、翌二十七年八月一日さびしく佐伯を去った。この間は正味十か月にしか過ぎなかった。しかし独歩を慕っていた数名の青年達は、独歩の後を追うように上京した。その中の一人は、後年日本のキリスト教会の大指導者となった、富永徳であった。

独歩逝いて既に久しく、今の佐伯は、独歩の当時とはいささか趣きを変えた点が多い。しかし、独歩が文学的情熱と、若さの足に物言わせて青年達と歩いた佐伯の自然と、そこに住む佐伯の人々の人情とは、今も昔と殆んど変っていないと思う。私共は、往年の佐伯の自然と人々のくらしを独歩の作品の中に知り、「ふるさと佐伯」の本然の姿を、今暫く求めなくてはならない。

その指導的地位に立ったのが、新生の佐伯独歩会である。私共の期待するところはすこぶる大きい。

二十年程前まで、一部の人達で守られていた独歩忌はいつかとだえ、主宰の佐伯独歩会の所在すら、誰も知らないということであった。何とか独歩会を復活したいものと願っていたのは私だけでなかった。そこで出しやばって史談会がお世話して、去る六月二十三日、「城山」文学碑の前で「独歩忌」をまとり、つづいて文化会館で

の、佐伯独歩会の再発会となった。集った方々は四十名ほど、外に十名近くの文書申込みもあり、かなりの盛況であった。会の規約を定め、役員を選任し、特生熊義会長、富尾寛・宮崎嘉一両副会長、それに七人の評議員その他がきまり、これで佐伯独歩会は新しい出発をした。

ここで私は、おわびを申さねばならない。知らなかったでは申訳がないが、昭和三十五年六月の独歩祭記念講演会を司会した今泉文三氏、発表をした真柴義彦氏のお二人が市内に居られた。その講演会の席末に連なっていた私は、その際の資料プリントを貰い、おもしろいと記憶までとっていた。何という迂闊さ、年齢のせいにしても恥かしい。外にご出席で、現に市内にご在住の方もおろうが、どうかご寛恕ありたい。

国木田独歩の往年の佐伯での生活や、その作品に残されている自然探訪は、もう私共の「佐伯の郷土史」として位置付けられている。史談会の会員はもとより、一般の方々のご賛同、ご入会を歓迎申したい。

会費　年額一、〇〇〇円、電話で次の事務局に申込まれたい。規約・役員名簿・会員名簿・今年度事業計画書、独歩の足跡とその作品資料送金用振替用紙をお送りする。会費払込みで正規会員となる。

申込先　佐伯独歩会事務局　佐伯市城南町
岩城　京方　電話佐伯二一三八二一番

佐伯市や周辺町村では、郷土人なら必ず国木田独歩から、わがふるさとのことを、ただで、今も、今後いつまでもその文学作品で、指導・宣伝してくれる。ありがたいことである。

佐伯独歩会の発展を心から希望するものである。（然）